



下末吉だより

令和 8 年 9 月 30 日

10月号

横浜市立下末吉小学校

「あゆみ」の歴史と現在の評価観、そこに込められた子ども像

校長 千葉 寛興

令和 8 年度も半年が過ぎようとしています。10 月は運動会や修学旅行など、子どもたちにとって大きな関心事がたくさんありますが、そんな関心事の一つに通知表、いわゆる「あゆみ」の配付があります。

日本では明治時代から成績を家庭に知らせる仕組みがありましたが、現在のような通知表が広く定着したのは第二次世界大戦後です。戦後の教育改革により、一人ひとりの子どもの成長を重視する考え方が広まり、学校での学習状況や生活の様子を保護者へ継続的に伝える手段として通知表が活用されるようになりました。

かつての通知表は、主としてテストの点数や教科ごとの成績を示すものであり、子ども同士を比較する相対評価の考え方に基づいて評価が行われることが一般的でした。そのため、子どもがどの程度集団の中で位置付いているかを示す役割が重視されていました。しかし、教育の目的が、単なる知識の習得から人格形成や主体的な学びの育成へと広がるにつれて、評価の考え方も大きく変化してきました。

現在の学習評価は、学習指導要領に基づき、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点を中心に行われています。また、他者との比較によって評価する相対評価ではなく、目標への到達状況を基準として評価する絶対評価(目標準拠評価)が基本となっています。単に結果として何点取れたかを見るだけではなく、学んだことをどのように活用できるか、自ら課題を見いだしながら粘り強く学ぼうとしているかといった、学習の過程にも着目することが重視されています。

また、通知表の役割そのものも変化しています。従来のように集団内での位置を示すことから、一人ひとりの成長の状況を把握し、次の学びにつなげるためのものとして位置付けられています。教師は子どものよさや可能性、努力の過程を丁寧に見取り、その姿を保護者と共有しながら支援の方向性を考えます。子ども自身も評価を通して自らの成長や課題を理解し、次の目標を設定することで、学習への意欲を高めることが期待されています。

このような評価観の根底には、「自ら学び続ける子どもを育てたい」という願いがあります。変化が激しく、将来を正確に予測することが難しい現代社会においては、知識を覚えるだけではなく、身に付けた知識や技能を活用して課題を解決する力、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力が求められます。そのため学校教育では、主体的に考え、対話を通して学びを深め、自分も他者も尊重しながら成長し続ける子どもの育成を目指しています。

通知表は単なる成績表ではなく、子どもの可能性を認め、その成長を支えようとする教育の理念が込められています。学校と家庭、そして子ども自身が成長の歩みを共有し、よりよい未来に向かって学び続けるための大切な記録として、通知表は今日も重要な役割を果たしています。こうした視点から見ると、「あゆみ」という名称には、子どもたち一人ひとりの成長の過程を温かく見守り、その歩みを支えていこうとする教育の願いが表れているといえます。保護者の皆様におかれましては、お子様の「あゆみ」をご覧になる際に、「何を頑張ったかな」「先生にどんなアドバイスをもらったの」と、ぜひ聞いていただければと思います。お子さんとの会話を通して、評定だけでは見えない、子どもたちの成長を実感いただければ幸いです。引き続き、子どもたちへの応援、よろしくお願いいたします。



下末吉小学校 HP